

Title	弱い相互作用をもつBose気体の最低エネルギー：DPO近似
Author(s)	西山, 敏之
Citation	物性研究 (1975), 24(1): 45-50
Issue Date	1975-04-20
URL	http://hdl.handle.net/2433/88999
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

弱い相互作用をもつ Bose 気体の 最低エネルギー, — DPO 近似 —

阪大教授 西 山 敏 之

(3 月 15 日 受 理)

§ 1. ま え が き

希薄 Bose 気体の最低エネルギーの値は散乱長 a の関数として Lee - Huang - Yang¹⁾, Beliaev²⁾, Hugenholtz - Pines³⁾ 達によって与えられた。他方, 高密度 Bose 気体の弱い相互作用の場合については, Feenberg 達の CBF 法⁴⁾ が Lieb - Liniger⁵⁾ の 1 次元の厳密解と一致する結果を与えることがわかっている^{6), 7)}。この結果は, Bogoliubov と Zubarev (BZ) の密度変数の方法⁸⁾ で得られた結果と一致することが Berdahl と Lee⁹⁾ によって示されたが, 最近高橋氏¹⁰⁾ は 1 次元系の δ - 関数相互作用をもつ系と 3 次元荷電 Bose 気体について Berdahl と Lee の証明は成り立たず, BZ は正しい展開項を与えないことを示した。ここでは, この差異が特殊な Bose 系に固有のものではなく, BZ およびそれと同等な他の理論¹¹⁾ の不備に基づく結果であり, この不備な点は著者ら¹²⁾ の密度位相演算子法 (DOP) において, いままで見過されていたエネルギー項を取りいれることによって修正され得ることを示す。Fröhlich¹³⁾ の指摘をまつまでもなく厳密な意味では密度 (または粒子数密度 ρ) に正準共役な量は存在しない。それにもかかわらず, 演算子の正しい順序を乱さないように注意すれば, 高密度弱結合の場合には正しい最低エネルギーの値を求めることができる。

ここでは簡単のために, 全粒子数の逆数 $1/N$ について 1 次の項までに話を限って, どのような修正が必要であるかを考えることにしよう。

§ 2. 運動エネルギーの $1/N$ 展開

Bose 系の場の演算子 $\psi^+(\mathbf{r})$, $\psi(\mathbf{r})$ を用いて運動エネルギーのハミルトニアンは, 質

西山敏之

量Mとして

$$H = \frac{\hbar^2}{2M} \int \nabla \psi^+ \cdot \nabla \psi \, d\mathbf{r} \quad (2.1)$$

となる。粒子数密度 $\rho = \psi^+ \psi$ の期待値が正の部分空間では、位相演算子 $\phi(\mathbf{r})$ を

$$\left. \begin{aligned} \psi^+(\mathbf{r}) &= \rho^{1/2}(\mathbf{r}) \chi^+(\mathbf{r}), \quad \psi(\mathbf{r}) = \chi(\mathbf{r}) \rho^{1/2}(\mathbf{r}) \\ \chi(\mathbf{r}) &= \exp[i\phi(\mathbf{r})/\hbar] \end{aligned} \right\} \quad (2.2)$$

によって与えると、(2.1)は

$$\begin{aligned} T &= \int d\mathbf{r} \left[(M/2) \rho^{1/2}(\mathbf{r}) v^2(\mathbf{r}) \rho^{1/2}(\mathbf{r}) + (\hbar^2/2M) |\nabla \rho^{1/2}(\mathbf{r})|^2 \right. \\ &\quad \left. + (\hbar/2i) \{ \rho^{1/2}(\mathbf{r}) v(\mathbf{r}) \cdot \nabla \rho^{1/2}(\mathbf{r}) - \nabla \rho^{1/2}(\mathbf{r}) \cdot v(\mathbf{r}) \rho^{1/2}(\mathbf{r}) \} \right], \quad (2.3) \end{aligned}$$

となる。ここで $v(\mathbf{r})$ は量子流体力学の速度に相当する量であるが、もっと正確にはコヒーレント表示における位相差演算子¹⁴⁾と考えるべき量である。 $\phi(\mathbf{r})$ を用いて表わすと

$$v(\mathbf{r}) = \nabla \phi(\mathbf{r})/M \quad (2.4)$$

である。ハミルトニアン(2.3)はBZからChan-Valatinの変換¹⁵⁾によって得られるエルミット形のハミルトニアン、またはBerdahlが用いたハミルトニアン、または砂川氏達のハミルトニアンと異なっている。この相異がまえがきで述べたエネルギーの相異と密接に関係している。ここで $\rho(\mathbf{r})$ と $\phi(\mathbf{r})$ のフーリエ変換

$$\left. \begin{aligned} \rho_k &= \frac{1}{\sqrt{N}} \int \rho(\mathbf{r}) \exp(-ik \cdot \mathbf{r}) \, d\mathbf{r}, \\ \phi_k &= \frac{\sqrt{N}}{V} \int \phi(\mathbf{r}) \exp(ik \cdot \mathbf{r}) \, d\mathbf{r} \end{aligned} \right\} \quad (2.5)$$

を用いて、 $1/N$ をあらわに含む項まで求めると

$$T = T_{\text{MPO}} + T^1, \quad T_{\text{MPO}} = T_2 + H_3 + H_4 \quad (2.6)$$

$$T_2 = \frac{1}{2M} \sum_{\mathbf{k}} k^2 \left(\phi_{\mathbf{k}} \phi_{-\mathbf{k}} + \frac{\hbar^2}{4} \rho_{\mathbf{k}} \rho_{-\mathbf{k}} - \frac{\hbar^2}{2} \right) \quad (2.7)$$

$$H_3 = \frac{-1}{2M\sqrt{N}} \sum_{k,l \neq 0} (k \cdot l) \rho_{k+l} (\phi_k \phi_l - \frac{\hbar^2}{4} \rho_{-k} \rho_{-l}) \quad (2 \cdot 8)$$

$$H_4 = -\frac{\hbar^2}{8MN} \sum_{k,l,m \neq 0} (k \cdot l) \rho_k \rho_l \rho_m \rho_{-k-l-m} \quad (2 \cdot 9)$$

$$T^1 = -\frac{\hbar^2}{8MN} \sum_{k,l} (k \cdot l) (1 - \rho_k \rho_{-k} - \rho_l \rho_{-l}) \quad (2 \cdot 10)$$

を得る。(2・9)は都築¹⁶⁾と Rajagopal-Grest¹⁷⁾によって計算されたハミルトニアンであり、今迄見過されていた(2・10)の期待値は発散し0にはならない。(2・8)と(2・9)と(2・10)の和を摂動項としてひとまとめにして取り扱えばエネルギー期待値は収束し、CBFと同じ正しいエネルギーが得られる。

§ 3. H_4 の期待値

非摂動ハミルトニアン H_0 は BZ と同様に相互作用ポテンシャルのフーリエ係数を V_k と書いて

$$H_0 = T_2 + \frac{N}{2} \sum_k V_k (\rho_k \rho_{-k} - 1) \quad (3 \cdot 1)$$

で与えられ、フォノンの生成消滅演算子 B_k^+ , B_k を用いると

$$\left. \begin{aligned} H_0 &= \sum_k \epsilon_k^B B_k^+ B_k + E_0^B, \quad \epsilon_k^B = \hbar^2 k^2 / (2M\lambda_k) \\ E_0^B &= -(\hbar^2/8M) \sum_k k^2 (1 - 1/\lambda_k)^2 + (1/2) N^2 V_0 \end{aligned} \right\} \quad (3 \cdot 2)$$

となる。ここで

$$\rho_k = \sqrt{\lambda_k} (B_{-k}^+ + B_k), \quad \phi_k = \frac{i\hbar}{2\sqrt{\lambda_k}} (B_k^+ - B_{-k}) \quad (3 \cdot 3)$$

とおいた。 λ_k は BZ の構造因子で V_k を用いて表わすと $(\hbar^2 k^2 / 2M)^{1/2} / \{(\hbar^2 k^2 / 2M) + 2NV_k\}^{1/2}$ となる。

(2・9) の対角要素 E_4 は、(2・9) が k, l, m について対称であることに注意すると次のように書き表わされる。

$$\begin{aligned}
 E_4 &= \frac{\hbar^2}{16MN} \sum_{k,l} (k^2 + l^2) \lambda_k \lambda_l \\
 &= \frac{\hbar^2}{48MN} \sum_{k,l,m} \delta_{k+l+m,0} \{ (m^2 \lambda_k \lambda_l + l^2 \lambda_l \lambda_m + k^2 \lambda_m \lambda_k) \\
 &\quad - 2k \cdot l \lambda_k \lambda_l - 2l \cdot m \lambda_l \lambda_m - 2m \cdot k \lambda_m \lambda_k \} \quad (3.4)
 \end{aligned}$$

(3.4)の右辺の第4, 5, 6項は Berdahl によって0とみなされたものであるが, この発散項は(2.10)の期待値 E_0^1 と加え合わすことにより

$$\begin{aligned}
 E_4^1 = E_4 + E_0^1 &= \frac{\hbar^2}{48MN} \sum_{k,l,m} \delta_{k+l+m,0} (k^2 \lambda_k \lambda_l + l^2 \lambda_l \lambda_m + m^2 \lambda_m \lambda_k) \\
 &\quad - \frac{\hbar^2}{24MN} \sum_{k,l,m} \delta_{k+l+m,0} \{ (k \cdot l (1 - \lambda_k)(1 - \lambda_l) + l \cdot m (1 - \lambda_l)(1 - \lambda_m) \\
 &\quad + m \cdot k (1 - \lambda_m)(1 - \lambda_k)) \} \quad (3.5)
 \end{aligned}$$

となる。この2番目の総和は1次元Bose系では $V_k = 2C$ とおくと¹⁰⁾

$$\Delta E_0^{BZ} = NC^2/12, \quad (\hbar = 2M = 1) \quad (3.6)$$

となって, 丁度BZとCBFのエネルギー差を与える項にほかならない。また, (3.5)の1番目の総和を H_3 の2次の摂動エネルギーに加えることにより

$$E_{02}^B = -\frac{\hbar^2}{48MN} \sum_{k,l,m} \delta_{k+l+m,0} \lambda_k \lambda_l \lambda_m \left\{ \frac{|A(k, l, m)|^2}{B(k, l, m)} - B(k, l, m) \right\} \quad (3.7)$$

$$A(k, l, m) = k \cdot l (1 + \lambda_k \lambda_l) \lambda_m + l \cdot m (1 + \lambda_l \lambda_m) \lambda_k + m \cdot k (1 + \lambda_m \lambda_k) \lambda_l \quad (3.8)$$

$$B(k, l, m) = k^2 \lambda_l \lambda_m + l^2 \lambda_m \lambda_k + m^2 \lambda_k \lambda_l \quad (3.9)$$

註. 都築氏によれば, (3.4)は, (2.9)式から, $k, l, m, -k-l-m$ の4対の伝播ベクトルについて対称比してから対角要素を求めることにより間違いなく導かれる。すなわち(2.9)の代わりに次のように対称化したものを用いる。

$$H_4 = + \frac{\hbar^2}{48MN} \sum_{k,l,m} (k^2 + l^2 + m^2 + k \cdot l + l \cdot m + m \cdot k) \rho_k \rho_l \rho_m \rho_{-k-l-m}$$

弱い相互作用をもつ Bose 気体の最低エネルギー，—DPO 近似—
を得る。この式は Rajagopal と Grest が求めた最低エネルギーの補正項である。

§ 4 最低エネルギーの式

Berdahl と Lee は， ΔE_0^{BZ} ，すなわち (3.5) の第 2 番目の総和を無視して， $E_0^B + E_{02}^B \equiv E_0^{CBF}$ を証明したが， ΔE_0^{BZ} を無視することはできないことがわかった以上，最低エネルギーの値は，DPO を用いたときには，次の総和式

$$E_0^{DPO} = E_0^B + E_{02}^B + \Delta E_0^{BZ} \quad (3.10)$$

を計算しなければならない。 $k^2 = -k \cdot (l+m)$ などを用いて

$$C(k, l, m) = A(k, l, m) + B(k, l, m) \quad (3.11)$$

$$= k \cdot l (1-\lambda_k)(1-\lambda_l)\lambda_m + l \cdot m (1-\lambda_l)(1-\lambda_m)\lambda_k + m \cdot k (1-\lambda_m)(1-\lambda_k)\lambda_l \quad (3.12)$$

を定義すると，(3.10) は次のように書き直される。

$$E_0^{DPO} = E_0^a + E_0^b \quad (3.13)$$

$$E_0^a = -\frac{\hbar^2}{48MN} \sum_{k,l,m} \delta_{k+l+m,0} |C(k, l, m)|^2 / B(k, l, m) \quad (3.14)$$

$$\begin{aligned} E_0^b &= \frac{\hbar^2}{24MN} \sum_{k,l,m} \delta_{k+l+m,0} C(k, l, m) + \Delta E_0^{BZ} \\ &= \frac{\hbar^2}{16MN} \sum_{k,l,m} k^2 (1-\lambda_k)(1-\lambda_l)(1-\lambda_m) \delta_{k+l+m,0} \end{aligned} \quad (3.15)$$

これは Lee¹⁸⁾ が，CBF によって導いたエネルギーの式と完全に一致している。

§ 5 結 び

以上のように DPO において，演算子の正しい順序を保ちながら計算すれば，BZ とは異なり，CBF と一致する最低エネルギーを求めることができる。このとき密度と正準共役な演算子 $\phi(r)$ の存在を仮定した。高密度，弱結合の極限では正しいエネルギーの表式が得られたことから，低密度 Bose 気体ではこの仮定が許されない可能性は十分あるが，

すくなくとも 1 次元系で, Lieb-Liniger のパラメーター $\delta = C/\rho$ の小さい値に対してはこの仮定が成り立つと考えてよいことがわかった。(2・9)式を伝播ベクトルに関する対称性を無視して計算すると間違った結果がでる場合がある。このような結果には, 摂動エネルギーが $V_k = 0$ の理想気体についても 0 にならないような発散級数が現われるので, その誤りを判別することができる。

参 考 文 献

- 1) T. D. Lee, K. Huang, and C. N. Yang, Phys. Rev. **106** (1957), 1135.
- 2) S. T. Beliaev, Sov. Phys. JETP **7** (1958), 289 ; 299.
- 3) N. H. Hugenholtz and D. Pines, Phys. Rev. **116** (1959), 489.
- 4) H. W. Jackson and E. Feenberg, Rev. Mod. Phys. **34** (1962), 686 ; E. Feenberg, **Theory of Quantum Fluids** (Academic Press, 1969).
- 5) E. H. Lieb and W. Liniger, Phys. Rev. **130** (1963), 1605.
- 6) F. J. Lee and D. K. Lee, Phys. Rev. **A9** (1974), 1408.
- 7) M. Takahashi, Prog. Theor. Phys. **53** (1975), No. 2.
- 8) N. N. Bogliubov and D. N. Zubarev, Sov. Phys. JETP **1** (1955), 83.
- 9) P. Berdahl and D. K. Lee, Phys. Rev. **A7** (1973), 1376.
- 10) M. Takahashi, private communication.
- 11) P. Berdahl, Ph. D. Thesis, (Stanford Univ. 1972) ; S. Sunakawa, S. Yamasaki, and T. Kebukawa, Prog. Theor. Phys. **41** (1969), 919.
- 12) T. Nishiyama, Prog. Theor. Phys. **7** (1952), 417 ; **8** (1952), 655 ; a preprint ; P. R. Zilzel, **The Many-Body Problem**, (Interscience Pub. 1963).
- 13) H. Fröhlich, Physica **34** (1967), 47 ; S. Nakajima and D. Yoshioka, Prog. Theor. Phys. **52** (1974), 733.
- 14) P. Carruthers and M. M. Nieto, Rev. Mod. Phys. **40** (1968), 411.
- 15) H. M. Chan and J. G. Valatin, Nuovo Cimento (X) **19** (1961), 118.
- 16) T. Tsuzuki, Prog. Theor. Phys. **52** (1974), 793.
- 17) A. K. Rajagopal and G. S. Grest, Phys. Rev. **A10** (1974), 1837.
- 18) D. K. Lee, Phys. Rev. **A4** (1971), 1670.